

鎌倉神樂（湯立・湯華）神樂八座の解説

吾妻鏡に於ける神樂の初見は寿永3年（1184・平安末期）正月元日の記事である、鶴岡八幡宮に始まり、これに司る人を職掌（シキショウ）神樂男と言う、その流れを現在に伝えているのが金沢区の佐野系と小池・吉田系である。打囃子（ウチハヤシ）

この場に於て神樂を奏することを神々に祈念し、一通り楽曲を奏して奉仕者はもとより、参列者の心意を昂めるための所作である。

羽能（ハノウ）

神樂の聖域をととのえつくるため、白扇の上に神饌の白米を持持し、これお四方に散供し稻靈の呪力によって、神樂の場に進入しようとする邪靈や邪氣（もの）を遠ざけて、聖域に神靈の降臨を仰ぎ、神樂の滞りない進行を祈念する淨めの舞いである。

御祓（オハライ）

神樂の座及び神々の降臨を仰ぐ「神籬」となる山、お湯、釜をはじめ参列者を合わせて、広く「聖域」の清め祓ひで、神々の降臨を仰ぐための御祓である。

御幣招（ゴヘイマネキ）

邪靈や邪氣（鬼、もの）を遠ざけ、清め祓も終えて、斎庭・聖域の正面に設けられた山（やま）、神籬に神々の来臨を仰ぎ祈る神招きの舞いである。（神々は、産土大神、火産靈神、弥都波能売神、三神）他八百万の神々である。

湯上（ユアゲ）

山に来臨された神々を拝する最初の所作。

邪靈を退け邪氣を鎮め清められて、生まれ出た尊い「お湯」を、まず最初に神々に献ずる所作。

釜の「湯たぶさ」のお湯を付けて、或は桶にうつして、神々に献ずる静かな舞いである。

なお、用いる「湯たぶさ」は必ず生き生きした釜をもって作る。

密生した釜むらが風もなく互いにふれあって、微かな音を発する。

この様子が神々の降臨を仰ぐ時の、依り来る神々の出現の様子に似つかわしいとされることから用られる。

中入り（ナカイリ）

以上で神樂の前段を終わる。前段は祓いの所作が中心で、生まれ出た尊いお湯を献するまでの経過であって、奉仕の神職も後段の「神事」にそなえて、狩衣を脱しての所作にうつるため心気を整える。

また、神樂の場に集参列者にも徹下の神酒などをわかつち、おさがりをお受けすることで神氣を直接に自分の体の中にいただき、確実に納めようとするのである。

搔湯（カキユ）

神招きの祈念をこめた御幣を持って、煮え立っているお湯を搔き、釜底から立ち上がる「湯の泡」の様子で今年の豊凶を卜し、沸騰し氣化した気泡を「湯華」という。

湯座（ユグラ）

湯たぶさをとて四方に舞い、湯たぶさから発する「しぶき」は、この神樂の場に来臨された神々の息吹となって、この場に集人々をはじめ、あたりに立っている樹木にも、種々のものにも振り注がれて年の豊作と豊漁、氏子、崇敬者の無事息災を祈念する舞いである。

射払い（イハライ）

邪氣を射払い、邪惡を射据えて、天の下平らげく氏子、崇敬者、安らげくあるべきを祈念する静かな中にも力強い舞いである。

剣舞もどき（ケンマイモドキ）

赤面の神が鉾をとて進み出て、五風十雨、豊年満作・大漁満足・天下泰平を祈念して氣息を整え、醜（邪惡）を踏み鎮め、天地運行の亂れを正、邪靈を鎮めて散供する。

途中より黒面の神が現れ、赤面の神の所作をまねたり、おどけたりして笑いを招きつつ座の雰囲気を和めながら散供する。

そして参列者が心に平安と和らぎをとりもどし、平常心即ち普段の心の状態にもどり、新しく充実し、増進した生命力をもって、再び日常生活にはげむようにさせるといゆう「もどき」の所作である。

以上で神樂全段の終了である。

※神樂終了後、矢、御幣など神樂道具を持ち帰ると、家内安全と御守護戴けます、又御釜の湯を体内に戴くと、無病息災の御利益があると、古来から言い伝へられております。

お参りの際ポット等に入れてお持ち帰り下さい。